

平成26年度 地域づくり海外調査研究事業調査報告書

**歴史的建造物を活かした
地域づくりについて**

～ホーエンザルツブルク城の事例から～

調査地：オーストリア共和国

ザルツブルク州ザルツブルク市

調査日：平成26年9月16日

平成26年11月

一般財団法人 地域活性化センター

総務企画部 企画・コンサルタント業務課

河原 勲

目次

<u>1. はじめに</u>	P. 2
<u>2. 坂井市 丸岡城 について</u>	P. 2
(1) 坂井市の概要	P. 2
(2) 丸岡城の概要	P. 3
<u>3. ザルツブルク市 ホーエンザルツブルク城について</u>	P. 6
(1) ザルツブルク市の概要	P. 6
(2) ホーエンザルツブルク城の概要	P. 7
(3) ホーエンザルツブルク城における施設の維持と管理	P. 10
(4) ホーエンザルツブルク城における観光	P. 12
(5) ホーエンザルツブルク城が抱える課題	P. 14
(6) 視察から見たこと	P. 15
<u>4. 坂井市への提言</u>	P. 16
<u>5. おわりに</u>	P. 17

1. はじめに

今日、日本各地において地域に残る歴史的建造物を活かした地域づくりが進められている。そうした際に活用される歴史的建造物には、寺院や神社といった宗教的建造物とともに城郭・天守閣があげられる。

国内に今も残る現存天守閣の12箇所しかなく、その中の一つに坂井市丸岡町に建つ国の重要文化財、丸岡城がある。日本最古ともいわれる歴史を持つ丸岡城は、市民にとってのシンボルであるとともに、地域における観光振興をはじめとする地域づくりを考える上で外すことのできない存在である。

歴史的建造物をどのように位置づけるか、その保護や活用に向けた取り組みは地域毎に異なっており、保護することに重点を置く自治体・地域がある一方で、積極的な活用を行っている自治体・地域も多く存在している。

地域観光の核として歴史的建造物を位置付ける場合には、後世に残すべき歴史遺産としての保護と、観光客を呼び寄せるための観光資源としての積極的な活用という、相反する課題を如何にして両立させていくかが重要となってくる。

今回、オーストリア・ザルツブルク市に建つホーエンザルツブルク城の保護施策と観光面での活用施策、今後に向けた課題についての調査を行い、その事例を学ぶことで、坂井市において今後取り組むべき歴史的建造物を核とした観光の在り方と、地域づくりの在り方について考察したい。

2. 坂井市 丸岡城 について

(1) 坂井市の概要

坂井市は福井県の北部に位置しており、面積 209.91 km²、人口約 93,800 人、県都・福井市に次ぐ規模の自治体として、平成 18 年 3 月 20 日に、三国町・丸岡町・春江町・坂井町の 4 つの町が合併して誕生した。

市東部には石川県境から続く山岳森林地帯が広がり、市西部は日本海を間近に臨む砂丘陵地、南部は九頭竜川、北部を竹田川と二つの河川に挟まれた市中部には県内随一の穀倉地帯である広大な坂井平野が広がっている。





[丸岡城天守閣の外観]

(2) 丸岡城の概要

① 建造物としての変遷

丸岡城は、12の現存天守閣の内、最古と考えられる建築様式を持った平山城である。

加賀国（現在の石川県）の一向一揆勢力に対する防衛拠点の整備を織田信長から命じられた柴田勝家が自らの甥である柴田勝豊に命じて1576年に築城された。丸岡の町も築城に伴って行われた城下町整備が都市的起源とされている。



[丸岡城天守閣の復元模型]

丸岡城天守閣は、高さ17.0mの城山上に建てられた外観二層・内部三層の望楼型天守閣であり、天守閣そのものの高さは12.7m、一枚の重さが20kgから50kgの石製瓦約6,000枚が屋根を覆っている。

築城以降、歴代城主による整備が進められた丸岡城は、天守閣を中心に本丸・二の丸が配置され、その外側を五角形の内堀と自然河川を利用した外堀が囲む広大な城郭を形成していた。

下の2枚の写真の内、左は2008年当時の坂井市丸岡町中心部の航空写真、右はその航空写真上に、1644年、徳川幕府が諸藩に命じて作成させた「正保城絵図」の「越前国丸岡城之絵図」を重ねたものである。



[航空写真：2008年丸岡城周辺]



[古地図を重ね合わせた航空写真]

明治維新によって丸岡城は廢城処分となることが決定される。一旦、官有となった後に
行われた競売によって城内に存在する物はことごとく民間へと売却されており、屋敷等の



【明治時代の丸岡城とされる写真】

建物や門・塀は全て撤去、立木も全て伐採される中、天守閣のみが残る状態となった。天守閣の落札価格は、同じく売却された物置小屋の20分の1以下、米4俵分に相当する額でしかなかったことが、当時の記録「丸岡城郭御払下入札人名帳」に残されている。こうした低評価となった理由を郷土史家は「民家で再利用することもできない石製瓦が何千枚も屋根に乗っている天守閣は解体も難しいため価値が低かったのではないか」と推察している。

利用価値が無いと落札者が見なした故に解体を免れた天守閣であるが、その後、町の将来のために必要な歴史遺産としての天守閣保存を目指す町民有志によって買い戻されることとなり、1901年に町へと寄贈されている。寄贈後、天守閣を含めた周辺一帯は公園としての整備が行われていくが、都市計画が優先された大正中期から昭和初期に内堀が埋められ、跡地に道路や住宅が建てられていったことで、丸岡城は往時の城郭としての姿を完全に失うこととなった。

利用価値が無いと落札者が見なした故に解体

天守閣は、1941年から3年間の工期で国による解体修理が行われていが、町は解体修理の総工費6万6千円の内4割にあたる地元負担分の工面に苦勞している。この窮状を救ったのが同町出身で北海道において財をなした実業家、荒田太吉氏（1877-1965）であり、一人で地元負担分のほぼ全額2万8千円余りを寄附している。しかしながら、現在、この荒田氏の貢献について知る市民は殆どいない。

1948年に発生した福井地震によって天守閣は倒壊という大きな被害を受けている。三階



【倒壊時の丸岡城天守閣の写真】

屋根の一部が崩れ落ちて原型を留めるのみで石垣も崩れ落ちる非常に深刻な状態であり、迅速な復旧が求められたが、戦後間もない時期であるために多額の予算が掛かる再建工事の許可を国から得ること、またその資金繰りに苦勞することとなる。こうした状況の中、当時の町長である友影賢世氏（1870-1970）は、十数回に渡り上京し、文化財行政担当部局との折衝を重ねるとともに、各地を巡って精力的な募金活動を行った。

こうして、震災発生から7年後の1955年ようやく天守閣は再建を果たした。工事にあたっては、先述した戦前の解体修理時に撮られた豊富な写真資料が活用されており、再建工事の許可が下りるまで倉庫内で管理保管していた倒壊部材を可能な限り再利用したことで、倒壊前の状態に限りなく近い形で再建されている。

地震によって一度倒壊しているため、丸岡城天守閣を日本最古級の「現存」天守とすることに疑問を抱く声も聞かれる。現存天守において解体修理が行われる際は、建物全体を一度完全に解体した上で、老朽化し今後の使用に耐えない部材を新規の物へと交換しながら再構築していく。丸岡城天守閣の場合、こうした解体修理ではなく地震による倒壊であるものの、使用可能な旧部材を可能な限り再利用して再建している点では解体修理と何ら変わりはないため、「現存天守」であるとされている。

また、1950年の丸岡城天守閣に対する重要文化財指定について、1934年に国宝保存法(旧法)に基づき国宝指定を受けていた天守閣が、1948年の福井地震によって倒壊したために、国宝から重要文化財へ“格下げ”されたという誤解が市民の間にも広がっている。

1950年に制定された文化財保護法では、第27条第1項に「文部科学大臣は、有形文化財のうち重要なものを重要文化財に指定することができる。」とし、同第2項で「文部科学大臣は、重要文化財のうち世界文化の見地から価値の高いもので、たぐいない国民の宝たるものを国宝に指定することができる。」としている。国宝保存法(旧法)における“国宝”は文化財保護法における“重要文化財”に等しく、そうした“重要文化財”の中でもとりわけ価値が高いとされたものが特に“国宝”とされているというのが正しい。

現在、天守閣が現存している12城(弘前城、松本城、丸岡城、犬山城、彦根城、姫路城、松江城、備前中山城、丸亀城、宇和島城、高知城、松山城)は全てが国宝保存法(旧法)における国宝(旧国宝)から文化財保護法により再指定された重要文化財であるという点では同格であると言える。

②丸岡城における観光

現在、丸岡城は天守閣も含めた一帯が公園としての整備が進み、城山一面に400本のソメイヨシノが植えられた同公園は“日本のさくら名所100選”にも認定されている。春や秋には同公園一帯を会場としたイベントも実施されており、2013年度に丸岡城を訪れた観光客数は約10万5千人、入場料収入は約3千万円となっている。

坂井市では、日本有数の名勝「東尋坊」、日本海の冬の味覚「越前ガニ」とともに丸岡城を重要な観光資源であるとし、誘客に向けたPRに取り組んでいる。しかしながら、同市観光地の観光客延べ入込数の内、約半数が「東尋坊」一箇所のみで占められており、「丸岡城」を訪れた観光客の割合は全体の1割強でしかない。地域として誇れる有望な歴史的建造物が現存する恵まれた環境にありながら、そのことを有効活用しきれていないということが長年の課題となっている。

3. ザルツブルク市 ホーエンザルツブルク城 について

(1) ザルツブルク市の概要



[オーストリアの主要都市]



た教会領から上納される莫大な財産を有する一大権力組織であり、ザルツブルクに大司教を配したのも、中欧からアルプス山脈を越えて南欧海岸部へと通じる主要街道に対する教会の権益を守るためであった。



[ザルツブルクの街並み]

ザルツブルク市は、オーストリア共和国ザルツブルク州の州都であり、人口 15 万人を擁する。

世界的に著名な音楽家モーツァルトの生地として、また、歴史上最も成功したミュージカル映画作品といわれる「サウンド・オブ・ミュージック」の舞台としても広く知られている。

同市は、壮麗なバロック様式の「ヘルブルン宮殿」や市街背後に聳え立つ「ホーエンザルツブルク城」、後期ルネサンス様式の大聖堂「ドーム」や 1997 年にユネスコ世界遺産に登録された「旧市街地」などの歴史的建造物を活かした観光が市の主要産業となっており、ヨーロッパ諸国を中心に世界中から同市を訪れる観光客は、日帰り客も含めると年間 600 万人から 800 万人にも及ぶ。

ザルツブルクは、798 年から 1803 年までの約 1 千年間に渡って、ローマ・カトリック教会の大司教区領として高位聖職者が領主となって統治する地であった。当時のローマ・カトリック教会は、教義の否定を許さない絶対的な宗教的権威、他と隔絶した豊富な知識階層、欧州各地に存在した

(2) ホーエンザルツブルク城の概要

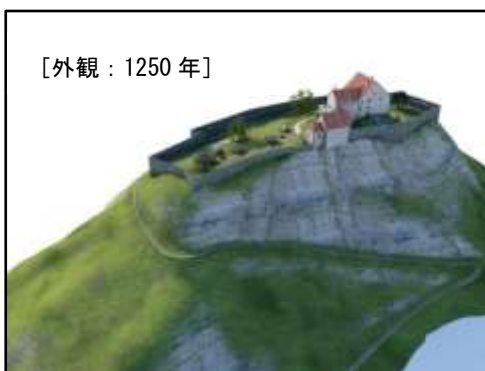


[ホーエンザルツブルク城の外観]

ホーエンザルツブルク城は、ザルツブルク市街地中心部の南、メンヒスベルクの丘の上に建っている。

同市をPRする写真や映像には、必ずと言っていいほど市街地の背後に聳える城の姿が写っており、同市を訪れる観光客に人気のスポットとなっている。

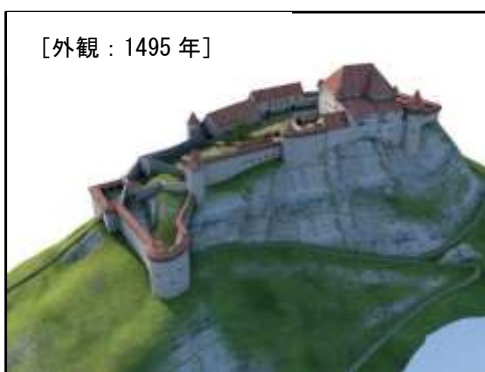
① 建造物としての変遷



[外観：1250年]

1077年、当時のザルツブルク大司教ゲブハルト・フォン・ヘルフェンシュタインが自らの権勢を広く知らしめるとともに、対立する勢力から身を守るための施設として築城を開始したのがホーエンザルツブルク城の始まりである。当時の城は、山の形に沿って簡易な堀を巡らし、中心部に教会とその付属施設が建つだけの小規模なものであった。その後の約400年間、統治者である大司教は

城下の街中に建つ居館で生活しており、城の機能や形態に大きな変化は見られない。



[外観：1495年]

1495年、当時のザルツブルク大司教レオンハルト・フォン・コイチャハの時代になって、はじめて城内に大司教が暮らすための施設が設けられるようになる。大司教が城内に常駐するようになったことで、城壁の増築や塔の建設が進められ、防衛拠点としての機能強化を目的とする増改築が繰り返し行われていくことで、その姿を大きく変化させていく。

15世紀から始まる防衛機能強化は、それまで緊急時の避難先として山上に建造された“砦”としての役割が大きかったホーエンザルツブルク城を徐々に恒久的な軍事拠点としての“要塞”へと変化させていく。建造当初からの数百年間、弓矢程度しか持たない敵に対抗するため壁さえあれば充分であった防衛力も、時代が進み、銃や大砲といったこれまでに



ない火力が戦争に用いられるようになったことで一層の防御力向上が図られるようになり、従来の壁の外側に何重もの壁を巡らすとともに、外縁部には大砲を据えて四方へ火力を指向することが可能な防衛陣地としての堡壘が築かれていく。

こうしてホーエンザルツブルク城は、初めてこの地に城が築かれてから現代までの約 900 年の間に、避難所としての砦から、中世封建領主の居城を経て、最終的には軍事拠点としての要塞へと、その姿を大きく変化させていっている。

1803 年、ナポレオン率いるフランス軍によるザルツブルク侵攻が行われた際、当時の大司教コロレドがウィーンへと逃亡、ホーエンザルツブルク城も無血開城したことで教会が統治する地としてのザルツブルクの歴史は幕を閉じる。その後のザルツブルクは、ドイツやフランスへの一時編入を経て、1814 年、オーストリア帝国の一部となり国家による統治が始まる。その後、ホーエンザルツブルク城に新たな領主が入ることは無く、現在へと至っている。

②城内の主な施設



【ケーブルカー】

1892 年、市街地と山上のホーエンザルツブルク城との間の往来用として建造される。最初に建造されたケーブルカーでは、ロープで繋いだ 2 台の台車の一方に水を入れ自重で下に下がることで、もう一方の台車を上に引き上げる方式が採用されており、エンジン駆動となる 1960 年まで使用されて続いていた。当該ケーブルカーは、後述する民間事業者によって管理・運営がなされている。



【塩の貯蔵庫】

ザルツブルクはドイツ語で“塩の城”を意味している。その昔、塩は金にも匹敵する貴重な財源であり、近郊に岩塩採掘場があったザルツブルクは塩の集積地として発展した。

当時、塩の貯蔵庫として使用されていたスペースを利用して、歴代大司教の肖像画と当時の城の姿を復元した模型が展示されている。



【監獄】

政治犯等の監獄として使用されていた部屋。城を訪れる観光客から、城内で拷問が行われていたのかと質問されることが多いため、敢えて公開を行っている。映画等の影響から連想される残酷なイメージは現実とかけ離れているため、アトラクション的な展示ではなく歴史上の事実を伝えるための展示が行われている。



【パイプオルガン “ザルトツブルクの牡牛”】

1502年作成。当初、パイプを通った音が牛の鳴き声に似ているため“ザルトツブルクの牡牛”と名付けられた。1640年にパイプオルガンに接続され、モーツァルトの父であるレオポルド・モーツァルト作曲による各月毎のメロディーを演奏する機能の追加が行われた。

かつては大司教の一日の行動を表す、4時（起床）、11時（昼食）、19時（終業）に演奏されており、現在でも、7時、11時、17時の一日3回に渡って演奏が行われている。



【黄金の小部屋】

大司教の居間だった部屋で、現在も天井や壁に独特の美しい装飾が残っている。部屋の隅には、1501年に製作された後期ゴシック様式の暖炉が置かれており、これにも非常に細かい装飾が数多くなされている。

現在、4年後の完了を目指した、専門家の手による壁の修復作業が行われている。



【黄金の広間】

権勢を誇った大司教が祝祭典や饗宴を催した広間。4本の大理石製の螺旋柱が壁に沿って並んでおり、青色の塗料が塗られた天井には金メッキの鋳がちりばめられている。

現在、この部屋において観光客向けの城内コンサートが催されている。

【城内の博物館】

城内には城郭協会の直接管理下にない博物館が3施設存在している。ザルツブルク市博物館の別館にあたり歴史的な家具や武器などが展示されている「城塞博物館」と、民間事業者が運営する「ライナー博物館」、「マリオネット博物館」である。



【城塞博物館】



【ライナー博物館】



【マリオネット博物館】

(3) ホーエンザルツブルク城における施設の維持と管理

①管理組織

ホーエンザルツブルク城における施設の日常的な維持と管理を行っているのが、ザルツブルク州の組織「ザルツブルク城郭協会（以下、城郭協会）」である。

城郭協会は、ホーエンザルツブルク城だけではなく、市内にある「レジデッツ（大司教の居館）」、近郊の「ホーエンヴェルフェン城」、「マウテルンドルフ城」の計4施設の維持と管理を担っている。



【ホーエンザルツブルク城】



【ホーエンヴェルフェン城】



【マウテルンドルフ城】



【レジデッツ】

②年間予算

ホーエンザルツブルク城の年間総予算は約 250 万ユーロ（約 3 億 5 千万円）。その内訳は、人件費が約 100 万ユーロ（約 1 億 4 千万円）、維持・管理費が約 50 万ユーロ（約 7 千万円）、その他が約 100 万ユーロ（約 1 億 4 千万円）となっている。

城郭協会は州の組織であるものの、その予算に対して国・州・市からの補助金は一切計上されておらず、全てが観光客の支払う入場料収入で賄われている。これは、城郭協会が維持・管理を行っている他の 3 施設についても同様である。

③職員数

城郭協会の職員としてホーエンザルツブルク城で働く者は、常勤職員 10 名、非常勤職員 20 名となっている。

常勤職員としては、維持・管理部門の責任者や観光部門の責任者の他に、城内の建造物や文化財の維持・補修を専門とする職員が 5 名存在している。こうした専門職員は、ウィーンにある専門の研修施設で、歴史的建造物や何百年も前の遺物を修復する技術を習得している。

④施設の維持補修における方針

施設の維持補修について城内で何らかの作業が行われる際は、作業と同時並行で専門技術者や歴史学者による調査が行われている。こうした取り組みは 150 年前から行われており、これまでの積み重ねを記録した様々な資料が城郭協会には残されている。

維持補修作業を行う際の方法として、建造・作成された年代に即した施行方法を可能な限り再現して行うという方針が 30 年前から採用されている。それ以前に作業が行われた箇所についても、順次、改めての補修が行われている。

（例 1：城壁の補修）

1960 年代、ホーエンザルツブルク城では城壁の補修を行うにあたり現代的なコンクリートを塗布するといった工事が行われた。現在、この誤った処置を正すために塗布されたコンクリートを全部剥がし、砂と水と石灰質しか使わなかった建造時の技法を採用した再補修が行われている。

（例 2：監視塔上の手すり）

監視塔上の手すりは黒く塗装されている。この塗装についても、中世の技術を復元した塗料による施工が望ましいものの、小麦粉に黒色の成分を含む葡萄を混ぜて作った当時の塗料は乾燥までに 3 週間程度かかるため、観光客が頻繁に手を触



れる手すり上部に使用するには不適切であるとの判断がされ、敢えて現代の速乾性ラッカー塗料を用いた塗装が行われている。

手すり下部には当時を再現した塗装が施されているが、塗装の下地に有毒成分が含まれていることが調査で判明しているため、危険性を考慮し有毒成分を防ぐためのコーティングを追加した施工が行われている。

(例3：黄金の小部屋の壁面修復)



1年前に始まった壁面の修復作業では、作業開始前に、当時の壁面にどのような図柄が描かれていたのか、これまで何回の修復が行われてきたのか、その修復がいつ誰によってどのような様に行われてきたのかを調査され、修復すべき箇所が特定されている。

修復にあたっては、当時の姿を可能な限り再現することを最も重視しているが、その結果として発色が鮮やかすぎる等、他との調和を欠いた結果になることが予想される場合には、敢えて異なる施工が行われている。

可能な限り当時の姿を復元することを最優先しつつも、安全性を考慮した現代的な判断も加味する城郭協会の維持補修の方法は、オーストリア国内でも高く評価されており、他の建造物を管理する団体等から助言を求められることも多いという。

(4) ホーエンザルツブルク城における観光

①観光客数

大司教による統治の時代が終わりオーストリア帝国の管理下に入ったホーエンザルツブルク城には、1830年頃から観光客が訪れるようになった。

その当時年間の観光客数は約4千人であり、観光客は歩いて登城していたことが当時の記録に残っている。1860年にウィーンからザルツブルクまでを結ぶ鉄道が開業すると、観光客数が急増し年間1万人を超えるようになる。また、1892年に市街地から城へ昇るためのケーブルカーが建設され、観光客の利便性が向上するようになると観光客数は年間4万人を超えるようになった。

現在、ホーエンザルツブルク城を訪れる観光客数は年間100万人を超えている。単独の施設を訪れる観光客数として見た場合、オーストリア帝国を治めたハプスブルク家の離宮

として世界遺産にも指定されているウィーンの「シェーンブルン宮殿」の約 290 万人に次いで第 2 位であり、ヨーロッパ各地に現存し一般に公開されている城の年間観光客数の平均が約 5 万人であることから、年間 100 万人の観光客が訪れることは特筆すべき点であるといえる。

②観光ガイドの多言語対応

ザルツブルクには年間 600 万人から 800 万人の観光客が全世界から訪れている。同市の観光名所として年間 100 万人が訪れるホーエンザルツブルク城において、こうした様々な言語を使用する観光客への対応は重視されており、観光客の負担軽減とガイド人員の省力化を図ってことを目的として、オーディオガイド・システムが導入されている。



[ガイドツアー入口の案内看板]

●オーディオガイド対応言語（大人）－11 言語

ドイツ語、英語、イタリア語、フランス語、
スペイン語、ロシア語、日本語、中国語、
オランダ語、ハンガリー語、チェコ語

●オーディオガイド対応言語（子供）－3 言語

ドイツ語、英語、イタリア語

城を訪れた観光客は、ガイドツアー入口においてオーディオガイド端末を借り受けた後、団体・個人の別に関係なく 20 名程度からなるグループを構成し、端末を通した解説を聞きながら一つの部屋から次の部屋へと城内を移動していくことになる。

こうしたグループには、安全確保のため必ず 1 名の係員が同行しており、緊急時の避難誘導にあたる体制がとられている。緊急事態発生と避難誘導開始を係員に知らせる際には、係員が持つ機器に周囲の観光客が分からないようなコード化されたメッセージが入るようになっているが、これはパニックを起こさず迅速な避難を行うために取って行われている措置である。

観光客が希望すれば、オーディオガイドではなく同行するガイドから直に解説を受けながら城内を巡ることもできる。こうしたガイドは年間約 700 件行われているが、オーディオガイドの同行係員が必要に応じてその役割を担っているため、ガイド専門の職員というものは存在しない。オーディオガイドの同行係員として雇用した者について業務の適性が判断された後、ガイドとしての研修が行われ実際の業務に就くこととなる。現在、ドイツ語と英語の会話ができる 8 名が業務にあたっている。

(5) ホーエンザルツブルク城が抱える課題

①歴史的建造物としての価値についてのPR不足

ホーエンザルツブルク城は、建造開始から現在までの約900年間に様々な交戦を経てきているが一度も陥落したことはなく、第2次世界大戦でも直接的な被害を受けていないため、完全な形で現存する中欧最大の城郭として非常に高い歴史的価値を有している。また、世界的旅行専門サイト「TripAdvisor」の“死ぬまでに行きたい世界の名城25”においては、ドイツのノイシュバンシュタイン城、日本の姫路城、中国の紫禁城、インドのタージ・マハル、チベットのポタラ宮などと並び賞されている。

このように、歴史的建造物としても観光地としても高い評価を受けているホーエンザルツブルク城であるが、城郭協会が行った近年のアンケート調査では、城を訪れる観光客の内9割が“ザルツブルクを一望できる眺望”のみを目的としており、旅行出発前から城を訪れることを決めていた観光客は3割以下、ザルツブルクに城があることを事前に知っていた観光客は4割以下、という結果が出ている。

眺望を目的とする観光客が多いことは以前から言われてきたことであるが、この調査によって、ホーエンザルツブルク城は観光客から市街地を見渡す展望台としてしか見られていないという点を城郭協会では非常に重く認識しており、これまであまり重視されてこなかった観光客向けのPR活動を強化していくことが予定されている。

②民間事業者等との協力関係見直し

ホーエンザルツブルク城の関連団体

- ザルツブルク城郭協会
(ザルツブルク州の組織)
- 城塞博物館
(ザルツブルク市の組織)
- ライナー博物館
(民間事業者により運営)
- マリオネット博物館
(民間事業者により運営)
- 城内コンサート
(民間事業者により運営)
- ケーブルカー
(民間事業者により運営)

ホーエンザルツブルク城には、城郭協会の管理下にはない関連団体が5つ存在しており、こうした関連団体との協力関係を再構築する必要に迫られている。

観光客が訪れるようになった1830年から現在までの間に、順次、城に関わるようになってきたこれらの団体の中で4つの民間事業者は、観光客が支払う入場料金の内、数%を自らの取り分とする権利を有しており、こうした権利に基づく慣例は、古い所では百数十年前、新しい所でも40年以上前から続いている。

眺望を目的とする観光客は黙っていても城を訪れてくれ、また、そこから十分な収入を得ることができるために民間事業者が観光客向けの改善・経営努力を行う意欲をもっていない点を、城郭協会では問題視している。

ホーエンザルツブルク城の「黄金の広間」で催されるコンサートは、観光客に人気の有るコンテンツとして6年前までは連日180人以上の観客が訪れる満員状態が続いていたが、近年になって急速に観客数が減少しており、最近では70人程度の観客しか入らない状態が

続いている。城郭協会ではコンサートを実施する民間事業者に対し、観客数増加のためモータールの時代を模した衣裳を使用する演奏等の改善策を提示したが、古くからの慣例に守られ一定の収入が確保されている民間事業者は、観光客のためとはいえコストが掛かる改善を敢えて行うつもりは無いとの見解を示している。

こうした考えは城内で博物館を運営する民間事業者も同じであり、数十年前に決めた展示内容を改善しようとする気持ちを持たないまま、代わり映えのしない状態が延々と継続されている。

ケーブルカーを運営する民間事業者についても、過去に城郭協会との間で方針の相違から対立した際、入場料全額がケーブルカー料金であると主張し、支払いを要求するという事態が発生している。

民間事業者は、国・州・市それぞれの政治家との間でコネクションを持っており、そのことが問題を一層複雑化させている。

城郭協会内部では、こうした改善に向けた意欲を持たない民間事業者との関係見直しが慎重に検討されており、その中では、現状のような半ば永続的な賃貸・権利保障ではなく、契約期間を数年間に限定する形式が望ましいとしている。

(6) 視察から見たこと

ホーエンザルツブルク城では、その維持・管理にあたる城郭協会が“可能な限り本物であること”と“アトラクションではない真実の歴史を学ぶ場であること”を方針とした取り組みがなされている。こうした方針は、歴史的建造物の在り方を考える上で欠いてはならない本質であることを改めて認識することができた。また、数多く訪れる観光客のことを考えたサービスの在り方については、今後、参考とすべき点が数多く見られた。

一方で、城郭協会が行ったアンケートにより、歴史的にも建造物としても非常に高い評価を受けるホーエンザルツブルク城が観光客からは“展望台”としてしか認識されていないという分析結果は衝撃的であった。城内で博物館等を運営する民間事業者がホーエンザルツブルク城に対して求めている価値も多数の観光客が訪れてくれる“展望台”としてのものではないのか、ひいては、ザルツブルク市民が同城を自らの“誇り”と感じているのか、という疑問もこの視察の中で感じた。

4. 坂井市への提言

現在、大阪市内に建つ大阪城天守閣は、豊臣時代と徳川時代の天守の姿を参考に鉄筋鉄鋼コンクリート造で1931年に建造されたものである。戦後の1950年代から60年代には天守閣の復元ブームが起り、名古屋城・岡山城・広島城・熊本城などの外観のみを復元した鉄筋鉄骨コンクリート造の天守閣が全国各地で建てられていく。1990年代から2000年代になると、今度は木造による再建ブームが起り、掛川城・大洲城などで天守閣が復元されていく。未だ復元には至っていないが、福井県内においても福井市や小浜市において天守閣を含めた城の復元を目指した動きが市民有志によって進められている。いずれの地域においても、天守閣は地域のシンボルとして、また、地域観光における核として位置付けられ復元を果たしている。その一方、天守閣が現存している丸岡では、合併前の旧町時代に出された長期ビジョンの中で、現在消滅してしまった内堀・外堀を再び掘り直すことをはじめとする城郭としての丸岡城復元の方針が示されていたが、合併後の坂井市では方針の一部を公園整備として引き継いだけ、その他は白紙としている。

現在の厳しい地方財政状況の中、今後、城郭の復元といった大々的なハード整備が行われることは無いと考えられるが、必要最小限の環境整備は必要であり、その際にはホーエンザルツブルク城における維持・管理の方針と同様に“可能な限り本物であること”を大原則とした整備を、順次進めることが重要であるとする。

天守閣について「華やかさが無い寂しい小さな城」、「昔から在って当たり前の物で特に何とも思わない」と考えている住民は多く存在し、自分自身、かつて某マスコミ関係者から「丸岡城とその周辺で行われるイベントは何処にでもあるようなありきたりなモノでストーリーが全く感じられない。本来であれば主催者として外部からの観光客を迎えるはずの地域住民サイドにも“行政に動員されたから仕方なく”といった“当事者意識の欠如”が見え隠れしており、取材するだけの価値を感じられない。」と直接言われたことがある。

他の地域が羨望する国内でも12か所しか存在しない現存天守閣、しかも最も古い形式を現在まで保ち続けてきた天守閣という素晴らしい地域のシンボルに“誇り”が持てない住民が多数存在する現状を打開するためには、地域住民、とりわけ子供や若者の意識改革こそが重要であるとする。

明治以降、丸岡城天守閣は何度も消滅の危機を迎えたが、その都度、乗り越えてこられたのは、時の政府や行政のおかげではなく、町の未来を考えた住民や関係者による尽力があったからこそである。今では知る人も少ない、かつての地域住民が成し得た業績を再評価するとともに、次の世代を担う層へと語り継ぐことで、地域に対する“誇り”と“自発性”を持った人材が育ち、そうした人材によってこそ真の意味での“地域づくり”が成し得るのではないかと考える。

行政としては、今後も一層の人材育成に取り組むとともに、地域のしがらみや過去の慣

例にとらわれない、住民主導による斬新な地域づくりを側面支援するための体制整備が何よりも重要であると考えます。

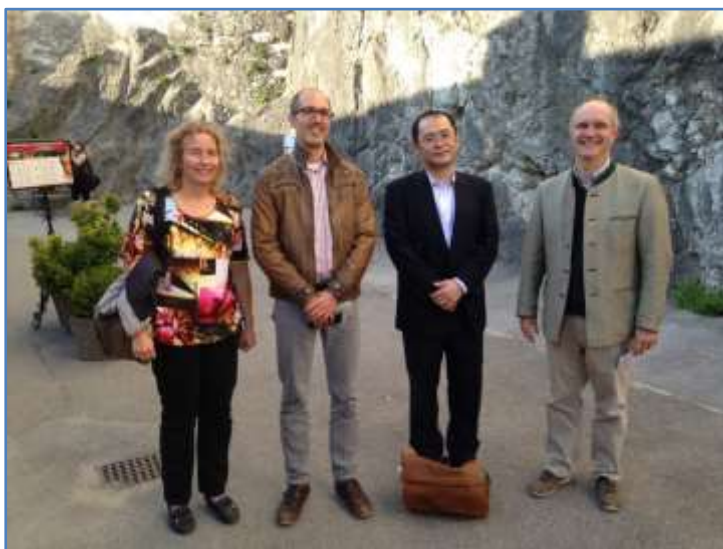
5. おわりに

今回の視察において、オーストリア・ホーエンザルツブルク城における取り組みを直に学ぶ、貴重な機会を得ることが出来た。

ホーエンザルツブルク城と丸岡城では、その歴史的な背景や、観光地としての在り方・観光客の規模において、全く異なる状況にあることは視察出発前から分かっていたが、施設の維持・管理における考え方や、城に対して地域住民が抱く意識についてなど、共感を覚える点も多く、又、今後の参考とすべき点も数多く発見することができた。

今回の視察で得た成果・ヒントを、今後の坂井市における地域づくりに活かして行きたいと思う。

最後に、今回の調査研究にあたり、快く視察を受け入れていただいたザルツブルク城郭協会のホーエンザルツブルク城維持管理部門責任者のベアンハート・ハイル氏、同観光部門責任者のマックス・ブルンナー氏に心より感謝申し上げ、本報告書の結びとさせていただきます。



(右端) ザルツブルク城郭協会 ホーエンザルツブルク城 維持・管理部門責任者
ベアンハート・ハイル氏

(左から二人目) ザルツブルク城郭協会 ホーエンザルツブルク城 観光部門責任者
マックス・ブルンナー氏